

## 共同即興する楽しみと喜び

橘英希(大阪大学)

本発表では、即興行為(improvisation)を複数の主体が共同で実践するとき、すなわち、「我々」が共同即興を実践するときに感じられる快感情について論じる。本発表は、行為者性感覚の哲学と音楽の認知科学から提供される既存知見に依拠しつつ、共同即興における二つの快感情「楽しみ」と「喜び」を概念的に区別することを目的とする。共同即興(joint improvisation)は共同行為の一種であるが、共同行為のなかで即興的なものと非即興的なものを概念的に区別する仕方には様々なものが考えられる。ここでは、行為実践が事前に練られた特定の計画によってガイドされないタイプの共同行為を共同即興と考えておく。この捉え方のもとでは、共同即興は必ずしも無計画ないし無目的ということの意味しない。典型的な共同即興の事例であるバスケットボールのチームプレイでは、プレイヤーはバスケットゴールにボールを通すという目的を共有しつつ、その目的に向かって即興的に計画を組み立てながらプレイする。カルテットによるジャズ演奏も然り。良い演奏をして良い音楽表現を生み出すという共通の目的のもとでジャズプレイという共同即興はなされる。本発表では音楽の認知科学からの知見を参照することから、基本的にはジャズ演奏のような音楽的な共同即興に焦点を当て、そこの行為者性感覚及び快感情について議論する。

本発表は、行為者性感覚(sense of agency)に関する既存の哲学研究、とりわけ、Lukitsch(2020)の理論に依拠する。行為者性感覚(以下SoAとも表記)とは、自己であることと感覚(sense of self)の構成要素として挙げられる、「行為するのは私である」との(前反省的)感覚である。LukitschはSoAを実効感(sense of efficacy)と努力感(sense of effort)の複合体であるとする。実効感とは、行為プロセスが順調に遂行しているとの感覚であり、努力感とは行為プロセスが抵抗ないし困難に直面しているとの感覚である。Lukitschはこのことを予測処理(predictive processing)理論の用語によって「SoAは予測誤差が継続的に減少していくときに生じる」とまとめる。行為が予測されたとおりに展開しないとき、すなわち予測誤差が発生するときに努力感が生じ、その予測誤差が行為の展開のなかで減少していくときに実効感が生じる。そしてSoAは、予測誤差の発生とその減少のジグザグのプロセスを経て(すなわち努力感と実効感とのターンテイキングを経て)、当初の予測誤差が行為の終点において減少したときに生起するとする。要するに我々は、困難な状況のもとで、しかし奮闘しつつも行為を達成できたときに、自分が世界で働く主体であり行為者であるとのセンスをもつのである。

本発表では、以上のLukitschの議論を、音楽聴取、とりわけグループ感の認知科学へと接続して、行為者性感覚には快感情が伴うというアイデアを取り出す。認知心理学ではグループ感という「音楽作品に対して身体を動かしたいという快楽を伴う欲求(pleasurable desire to move to music)」が、いかなるリズム構造をもつ作品に対して感じられるかが探求されている。Witek et al.(2014)は作品のもつシンコペーション構造とグループ感の相関を調査した結果、両者が逆U字の関係にあることを見出した。つまり、シンコペーションの程度が高すぎても低すぎてもグループ感が高まらず、中程度のそれがグループ感を、すなわち、身体揺動欲求と快楽を最も喚起するという発見である。Vuust et al.(2018)はこの心理学的知見を予測処理理論の観点から理論化

した。それによれば、中程度のシンコペーションないし複雑性をもつ音楽作品に対して人が身体を動かしたくなり、そして実際に動かすのは、作品のリズム構造についての予測と実際の感覚入力との誤差(すなわち予測誤差)を解消するための能動推論(active inference)の一環である。グルーヴィーな曲に合わせて身体を揺らすことは能動推論によって予測誤差を解消しようとする試みであり、その結果実際に解消がなされたとき、人は快楽を感じる、ということになる。

ここで、LukitschによるSoAの理論と、WitekやVuustらによるグループ感の理論を総合すると、次のようなアイデアが生まれることになる。行為主体は、適度に複雑な環境において活動に従事するとき、環境への働きかけによって予測誤差を減少させることで、自らの行為者性を感じ、それに伴い快楽を感じる。

本発表ではこのアイデアを導きの糸として、共同即興における行為者性感覚、及び、それに伴う快感情を概念化する。Lukitschの議論は共同行為ではなく単独行為におけるSoAを対象としており、共同即興におけるSoAについては何も語っていない。本発表ではLukitschの理論を拡張して、共同即興におけるSoAを次の三つのタイプへと整理する:1)「我行為者性の感覚(sense of I-agency)」、2)「汝行為者性の感覚(sense of you-agency)」、3)「我々行為者性の感覚(sense of we-agency)」。快感情については、WitekやVuustらの研究は人間と音楽作品の関係を対象としており、共同即興におけるような音楽を奏で合う人間同士の関係については何も語っていない。本発表では共同即興における快感情を次の二つのタイプへと整理する:a)「我」と「汝」の主体的交換の「楽しみ」、b)「我々」が表現することの「喜び」。

1)は、共同即興において「我」が「汝」の繰り出す音楽に対して能動推論することで予測誤差を減少させるときに発生する感覚、2)は、「汝」が「我」の繰り出す音楽に対して能動推論によって働きかけるときに「我」において生起する感覚である。このように相互に能動推論によって働きかけ合うとき、主体の双方において互いの音楽に対するグループ感が発生しているはずであり、これに伴う快感情がa)の「楽しみ」である。そして3)は、相互的能動推論ないし相互的呼応のプロセスを経て、「我」と「汝」の音楽的予期が次第に調和していき、結果として良い音楽表現が共同で生み出された時に感じられるSoAである。b)の「喜び」はこれに伴う快感情である。a)の「楽しみ」が対人的な感情であるのに対して、b)の「喜び」は音楽世界との関係において感得される感情だ。音楽世界において自己を表現すること、しかも「我」だけではなし得なかった仕方で、ということつまり「汝」がともに演奏することによって可能となった仕方で自己表現がなされたとき、そしてさらには、そのことが双方において「我々」の表現として感じられているときに持たれる感情が「喜び」である。

文献

- Lukitsch, O. (2020). Effort, Uncertainty, and the Sense of Agency. *Review of Philosophy and Psychology*, 11, pp. 955-975.
- Vuust, P., Dietz, M. J., Witek, M., Kringelbach, M. L. (2018). Now you hear it: a predictive coding model for understanding rhythmic incongruity. *Annals of the New York Academy of Science*, 1423-1, pp. 19-29
- Witek M. A. G., Clarke E. F., Wallentin M., Kringelbach M.L., Vuust, P. (2015). Syncopation, Body-Movement and Pleasure in Groove Music. *PLOS ONE*, 9-4, e94446